

Title	ドゥラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教(一)
Sub Title	A survey of the materials from the Mithraeum of Dura-Europos
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.2 (1972. 1) ,p.1(137)- 23(159)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドウラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教（一）

小川英雄

一、序

ローマ帝政期の西暦一世紀後半から同四世紀中葉にかけての約二〇〇年間、ペルシア起源の神ミトラス密儀の信仰がローマ帝国のほとんどすべての地方で見出される。それはこのように広大な分布を示すにもかかわらず、その間常にあらゆる場所で、基本的な点で同質の宗教集団の現象として存在した。このことは出土する遺物や遺構の基本的類似性から明らかである。即ち、中央通路とその両側のベンチからなる内陣とそのつき当たりにある至聖の奥室とから成る神殿があったこと、そこでは特定の資格をもつた信徒達が密儀にあずかり、救済を得るために会合したこと、そして、奥室には主として浮彫によつて表わされた「牛を屠る神ミトラス」の図像が掲げられていたこと、これ等はローマ帝国のミトラス教の最小必要限の構成要素であった。

ミトラス教研究の組織者 F. Cumont は、ミトラス教を古代ペルシアのマズダ教のローマ的形態と規定した。この表現は、ミトラス教の起源とそのローマ帝国内に限られた分布とを巧みに言い表わしたものであったが、実際に彼の説くところは、ペルシアから西方へのミトラス神信仰の漸進的進化であり、マズダ教におけるペルシア的ミトラとローマ帝政期の密儀の神ミトラスとの質的な相違、従つてミトラス神信仰の根本的な転換の行われた時期と場所についてかなりあいまい

な点があつた。⁽¹⁾ 彼以後の研究者たちも、ペルシア起源とローマ的性格との相克に常に悩まされて來た。⁽²⁾ そして、Will⁽³⁾ が強調する通り、ペルシアとローマのミトラス神信仰の間には、密儀であるかどうかと云う点で宗教として根本的な相違があることをまず認めなくては、ミトラス教形成史を正しく認識出来ないと言うのが、最近の研究史的傾向であると考えられる。即ち、冒頭で述べたローマ帝国のミトラス教信仰の諸特性は一言で言うと、密儀宗教のものであつた。しかし、同時にミトラス神がペルシア起源の神であることも否定することが出来ない。⁽⁴⁾ 従つて、ミトラス教形成史の課題は、Cumont が考えたよりな漸進的進化の過程を追うことではなく、質的な転換が起つた場所と時期、その際の様相をつきとめることである。

現在までに、ローマ帝国属州において一〇〇余りのミトラス神殿址が知られている。ミトラス教徒の宗教生活の場として、これ等の神殿が最も大切なことは勿論であるが、そのうち四〇%は発掘調査が全く不十分で、ただその存在が報告されているにすぎない。残りの六〇%は何等かの遺構や遺物が報告されたものであるが、十分な考古学的研究がなされ報告書が刊行されているものは、約一五件にすぎない。⁽⁵⁾ ところが、ローマ帝国の西アジア属州（シリアや小アジア）については、フェニキアの Sidon とハウラン地方の Secia で神殿址が確認されたとは言え、十分な報告書が出されているのは、本稿で検討しようとするドゥラ・エウロポス (Dura-Europos) のものたゞ一つである。漸進的進化の立場に立たない場合は、ミトラス教の立教の地を必ずしもペルシア世界とローマ世界の中間地帯（メソポタミア、シリラ、小アジア）に置かなくてはならないと言う前提是成立しないが、ドゥラからはこの問題について重要な寄与をなしうる多くの史料が出土しており、それ等は他のミトラス神殿に類を見ないものである。本稿の目的は報告書全体を批判的に紹介すると同時に、上記のような点に関して問題点の一部を指摘することにある。勿論、一九三五年の劇的な発見以来多くの研究者がこの問題を論じて來た。その代表的なものを大別すると、次の三つに分ち得るようと思われる。即ち、第一はドゥラのミトラス教

の西方起源説であつて Rostovtzeff や Will ⁽¹⁾ が代表する。彼等は、ドゥラのミトラス教美術に土着的要素の存在を認め、それはそこ(2)のミトラス教の由来とは別であるとする。土着の表現様式がミトラス教徒によつて利用されたにすぎないといふのである。Will はドゥラの土着的表現はライン川、ドナウ川、イタリアなどの地域毎にみられる特性と同じ性質のものでありそれ以上の意義はあり得ないとする。Rostovtzeff は、ドゥラの美術はパルティア帝国のセム世界で発生した「美術的・宗教的共通言語」(Koinē) の流れをくむ最初の実例として、その独創性をきわめて高く評価するが、トーラヤヌス帝以後のローマ領の時代以後に導入されたユピテル・ドリケヌス神崇拜、ミトラス教、ユダヤ教、キリスト教などは、この創造的活動と直接関係なく、出来上つたものの利用者であつたと考えた。

第一の考え方は、Cunmont や Campbell のように、シリアのミトラス教を西方のミトラス教と同祖異系の関係におき、シウラのミトラス教をはじめとする前者は、ミトラス教の発生地とされて来た小アジアから南下した、より古い要素を含んでゐる。従つて、やんの宗教美術の特異性は土着のものを通じてあらわれた小アジアのミトラス教に由来する、と考えた。Frothingham ⁽³⁾ は、発するに難点があるが、第一の西方説の立場も、ミトラス教の起源を小アジアに求めると言う点では同じである。

第二は Dussaud, Ghirshman, Widengren などの大河河畔学者の東方説である。彼等は多かれ少なかれ、Rostovtzeff の「共通言語説」を拡大して、ペルティア帝国領内の宗教と宗教美術（或はその先駆となつた西アジアの伝統）から直接的にミトラス教の成立を説明しようとする。要するに、この立場と第一・第二の立場との間には、ドゥラをめぐつて、一つの大きな争点がある。即ち、ミトラス教の形成に当つては、ミトラス教以前に確立していた「美術的宗教的共通言語」が、冒頭にのべたようなミトラス教の決定的出現にとって、何等かの役割を演じたのであろうか、或はそうではなく、シウラのミトラス教はこの宗教が小アジアを中心とする西アジアのどこかで形成されたのち、西方にひきさがり、そ

れが再び西アジアにもどつて来て、そのような「共通言語」に出会つたのであるか、とむずかしい問題が提起されているのである。

II、歴史的背景

ドウラ・エウロポスはシリア砂漠の北辺にあり、メソポタミア世界への南中央部からの入口をなす。ユーフラテス川中流域の右岸にそびえる崖の上の扁平な台地上の都市遺跡で、現在は全くの廃墟である。ほゞ方形の、城壁に囲まれた碁盤目状の街並であるが、ユーフラテス川から切れ込む深い谷間が、町の東西両側に沿つて存在する。残された唯一つの側面、即ち、川と反対側（南）のそれだけがシリア砂漠に向けて開けており、シリアの隊商都市、とりわけパルミラに向う交易路がそこから出発した。このような地理上の特性から、ドウラの第一の性格は要塞であり、第二はシリアとメソポタミアを結ぶ交易の中心と言つてよい。ドウラはメソポタミアに接するシリア砂漠沿いの地方、即ちパラポタミアの中心地であると同時に、ヘレニステイク時代の冒頭からシリア砂漠の全周辺部にわたつて定着運動を開始したアラブ系諸民族の監視の場所でもあつた。ドウラの二つの性格——城砦と隊商都市——は、このアラブ人たちの都市生活への侵透をぬきにしては理解出来ない。とりわけ、パルミラのアラブ人商人貴族たちの経済的、文化的影響力が、ドウラにおける上述の「美術的宗教的共通言語」の支柱となつてゐる。彼等は隊商活動の担い手として出発したが、やがて最初のギリシア系入植民たちに代つて、軍事的支配権も掌握してしまつた。その正確な過程は古代の文献によつては詳しく知ることは出来ない。ドウラについての言及は極めて少いからである。そればかりか、一九一一年に一英軍将校 (Captain Murphy) が Tell es-Salihye と呼ばれていたこの遺跡で数枚の壁画を発見し、それが Breasted⁽¹⁰⁾ によって注目されるまでは正確な場所も知られなかつた。

ミトラス神殿を含む多くの重要な発見がなされ、ドゥラの歴史が復元されたのは、フランス古文書学院が派遣した Cumont 指揮の発掘隊⁽¹⁴⁾（一九二二～一九三）と、同学院とイエル大学が派遣した Rostovtzeff 指導の発掘隊⁽¹⁵⁾（一九二八～三七）の調査のおかげである。以下、その調査結果から Rostovtzeff と Cumont がまとめたもののうち、ミトラス神殿と関係のある事柄を中心にドゥラの歴史を辿ってみよう。⁽¹⁶⁾

ヘレニストイク時代以前から用いられていたこの遺跡の名前はバビロニア語起源のドゥル (Duru) であったが、前三〇〇年頃、セレウコス朝の王セレウコス・ニカトルの時代に、ヒポダモス式の町並を持ったマケドニア兵の入植地として開発されるまでの歴史は考古学的には確認されていない。事実上、セレウコス朝初期の都市建設活動の一環として、エウロポスと言う外来の名の下にはじまつたのである。このマケドニア時代の遺構や遺物は驚くほど少い。多分、約二〇家族ほどのマケドニア系住民が支配する城砦であった。前一四〇年頃、ミトラダテス一世治下のパルティア人の勢力が西進し、セレウコス朝からメソポタミアを奪つた後、後一一七年まで約二五〇年間のドゥラのパルティア時代がはじまつた。しかし、パルティア時代の前半約一〇〇年間についても考古史料はほとんど取るに足りない。恐らく、セレウコス朝から独立しつゝあつた地方のコマゲネ、エメサ、カルキス、オスロエネ、南方のイトウレア、ナバテアなどの土着のセム系商業国家の主都と同様に、隊商都市として発展しはじめたのであろう。

考古史料が残っているのは前一世紀中葉以後である。都市としての体裁がととのい、市場や公共建築物や民家が当時のパルティア領内に見られるのと同じ様式で建てられた。このような新たな展開の背後には、セレウコス朝の滅亡と、パルミラとドゥラの間を境界線とするローマ帝国とパルティア帝国の勢力圏が定まり、両世界の交流が隊商都市の重要性を増大させたと言う事情がある。しかしながら、特に注意すべき点はこのようにして出来た世界の担い手が、パルミラ人であったことである。彼等自身自分の都市をより南の隊商路を握るナバテア人の世界に対抗して発展させ、まさに富裕化しよう

とする前夜にあつた。彼等が残した最古の碑文は、前四四年のベル神の神宮たちのものであるが、その一年後にはドウラにおいてパルミラ語のベル神への碑文が奉納された。⁽¹⁸⁾ この宗教的影響と同時に、パルミラ人たちは当時のシリアの軍事史上にしばしば現われるアラブ人の伝統に従つて、隊商路沿に騎馬弓術兵の部隊を配置し、両帝国の中間地帯でいわば独自の保安活動を行つていた。⁽¹⁹⁾ ドウラもパルティア帝国内において自治（委任統治）を認められていたので、パルミラ人の交易活動はこのような独自の組織によつてドウラにまで延びていたと考えられる。ドウラの隊商都市としての最盛期は後一二世紀の間であった。

しかし、ミトラス神殿が出現した後一二世紀のドウラの歴史は、隊商都市としては衰退しつゝあつた。なぜなら、東西両世界の対立が厳しくなり、商業よりも軍事が優先しはじめたからである。パルミラ人の自活活動は後二五六六年にササン朝のシャプル一世がシリアに侵入し、エデッサでローマ皇帝ヴァレリアヌスを捕虜とし、その後にドウラを包囲陥落させた時まで、かなり抑圧された状態にあつたらしい。とりわけ、後一六五年にマルクス・アウレリウス帝時代の東方戦線の将軍ルキウス・ヴェルスがパルティア王ヴォロガエセス三世をドウラで破り、バラポタミアをローマに併合してからは、パルミラ人の東西両世界の仲継者としての役割は失われてしまつた。この頃からのドウラ市は再び城砦都市にもどつた。しかし、前二三〇年頃セヴェルス朝の手によつて、ミトラス神殿のある地区を含めて市街の四分の一がローマ軍の陣営とされるまでのドウラについてはなお不明の点が多い。パルミラ人の弓術部隊はヴェスパシアヌス帝時代からローマの補助軍として盛んに活躍し、シリアばかりでなく、ダキア、ヌミディア、ブリタンニアなどに、パルミラ兵の足跡が残されている。⁽²⁰⁾ しかし、彼等はドウラにおいても、ドウラとパルミラを結ぶ隊商軍事道路上においても、明確な痕跡を残していない。後述するように、ドウラのミトラス神殿の最初の碑文は、パルミラ人の弓術部隊の隊長によるものであるが、これがローマの補助軍であつたかどうかは明らかでない。しかし、最近の研究動向によると、⁽²¹⁾ パルミラ市はローマ帝政初期から

ローマの管理下にあって、自由な活動を抑えられていたので、この弓術部隊はローマに忠実な立場にあつたか、或は Comte du Mesnil du Buisson の如きように、傭兵隊的性格も考えられる。

ドウラが一大軍事拠点となり、コロニアに昇格したのはセヴェルス朝時代である。後二〇九年～二一年の間に奉納されたミトラス神殿の碑文によると、当時ここには二つの正規軍団が駐留した。他の碑文によると、補助軍としてパルミラ人の第一〇騎行弓術部隊が遅くとも後二〇八年までに存在し、後二三〇年にはそれがドウラに駐留したことが分っている。⁽²⁵⁾ この部隊の内容については、パルミラ人だけとする Cumont とパルミラ人を含む混成部隊とする Rostovtseff との間で意見が分れるが、部隊番号から推して、このタイプの兵力は最低の見積りでも合計一万人以上あつたと推定される。ドウラは S. Severus, Caracalla, Macrinus, A. Severus, Gordianus III, Philippus, Valerianus などの諸皇帝の東方遠征の基地となつた。

以上を概観すると、ドウラの隊商都市としての発展はパルティア領時代の後半（前一世紀中葉～後一六五年）の間のことであり、パルミラの隊商都市としての発展と時間的に一致し、パルミラ人が両市の社会の担い手であつた、と云ふことが出来よう。ローマ領時代に入ると商人の数は少くなり、隊商路は軍事地帯のドウラを避け、Anah や Hit のような他のユーフラテス川沿いの拠点に仲継地を求めた。⁽²⁶⁾ このようなドウラの盛衰は文化面にも反映している。

III、文化的背景

上述のように、ドウラとパルミラの関係は両市の興起した時代にはじまり、しかもそれはとりわけ宗教の面で著しい。⁽²⁷⁾ 両市の間には共通の宗教と祭祀が行われていた。次に Rostovtzeff と du Buisson に従つて、⁽²⁸⁾ ドウラのパルティア領時代の「疑惑的な宗教的カオス」を一覽し、同時にドウラとの比較のため、パルミラ、ペトラを中心とするナバテア、ナバテア

人などアラブ系住民を中心とするローマ帝政初期ハウラン地方³¹の神々のリストを対照(○印は共通のもの)させてみる。

	ドウラの神々	パルミラ	ナバテア	ハウラン
シリアル系	Hadad	○	○	○
	Atargatis	○	○	○
	Adonis			
	Baal-shamin	○	○	○
メソポタミア系	Bel	○	○	○
	Shamash	○		
	Artemis Nanaia		○	
	Artemis Azzanathconia			
	Aphlad	○		
	Nebo	○		
アラブ(パルミラを含む)系	Arsu	○		
	Yarhibol	○		
	Asherū	○		
	Agribol	○		
	malakbel	○		
	Allat (Athera)	○	○	○
ギリシア系	Apollo			○
	Heracles	○		
都市守護神	Tychē (Dura)			
	Tychē (Palmyra)	○		

これ等の神々のうち主要なものは前一世紀後半から後二世紀前半にかけて、石壁に囲まれた境内の中央後方寄りに本殿

をもつシリアル式神殿において挙げられた。ギリシアやパルティアの宗教建築の影響もあるが、ローマ領時代以後に建立されたとみられるミトラス神殿、キリスト教会（後二四〇年代）、シナゴーグ（後二四四～五年）とは根本的に建築上の機能が異っている。即ち、前者は古代宗教特有の「神の住家」としての神殿であるのに對し、後者は信者の礼拝所、宗教行為の場としての会場であり、神像があつても象徴的な意味をもつにすぎない。ヤハウエの力はシナゴーグでは神の手で表わされてい⁽³²⁾。そして、聖所はドウラの場合に見られるように、個人の住宅を改造したものから発達した。このような相違は宗教的内容の相違でもある。

Rostovtzeff は前者とその図像から看取される「宗教的美術的共通言語」を土着の文化的發展の成果とし、後者にも同様の傾向が受けつがれていることを指適する。彼は前一世紀から後一世紀にかけて起つたこの「共通言語」の実態を次のようにものとする⁽³³⁾。即ち、神殿内陣における壁画（後には浮彫）装飾が（1）礼拝用神像（2）信者奉納図（3）神の聖業一代記を含み、適宜彫刻による神像奉納が行われる。更に、Rostovtzeff は Cumont の太陽神崇拜一神教の出現に関する理論⁽³⁴⁾をとりあげ、この新形式の莊嚴をもつ宗教は基本的には、パルティア帝国内のセム系天神が超越神的性格へと進化したものを中心とする。ドウラの諸宗教はその最初の実例である。このような傾向は、パルミラ Baal-shamin 神の宗教などに著しく現われている⁽³⁵⁾。これがミトラス教で代表される太陽神崇拜一神教と言ふことばで表わすことが出来るものかどうかは疑問があるが、Rostovtzeff が指適する通り、ドウラのミトラス神殿やシナゴーグの莊嚴にこのような要素がみられるのみか、それはローマ帝国全体のミトラス神殿の共通な特性でもある。

Rostovtzeff は更に、この宗教美術の表現様式の特色を枚挙し、凝固性、平面性、線描法、人物表現における顔面の正面面⁽³⁶⁾、正視するまなむし、肉体よりも着衣、装身具に対する関心の強さなどを指摘する。要するに宗教的行為をする人間の象徴的表現が中心となつてゐる。これ等も又、多かれ少なかれミトラス教美術にとり入れられているものである。例え

ば、Vernaseren はローマのサンタ・プリスカ教会地下のミトラス教神殿壁画中の人々や若干のミトラス教神殿から発見されたクロノス神像について、熱烈な感情をあらわす真剣なまなざしを指摘している。⁽³⁷⁾

又、ミトラス神殿やドゥラ在住のパルミラ人の住居の壁画に描かれた狩獵図の描法や様式にも同系統の表現法によるパルティア人の生活形態が看取されている。⁽³⁸⁾ Dussaud はこの狩獵図の東方的伝統を強調し、ドゥラなどシリアのミトラス教の原始的性格を強調するのに対し、Rostovtzeff はそれを認める一方、ドゥラの「牛を屠る神ミトラス」の図像は西方的なものとし、ドゥラにおいて東西両要素が地域的な特色として合体していると考えた。⁽³⁹⁾ しかし、狩獵図の中の翻えるマントの表現法はササン朝美術に伝えられた東方的な伝統であると同時に、ミトラス教の殆んどの「牛を屠る神ミトラス」がまとorman にも見られるものである。⁽⁴⁰⁾

要するに、ヘレニステイク時代末期からローマ帝政初期にかけてのシリアとパラポタミアには、上記の表によつてみられる通り、原住民社会の間に各地域の古い神々の混合した状態が存在し、その祭祀には神殿の様式や宗教美術が示すような共通の形式「共通言語」が生れていた。その形式はミトラス教にも影響を与えていることは明らかであるが、それはミトラス教がこの地でこの時代に発生したことを物語るのであろうか。或は、他の場所で発生したものが、この形式の一部を恒久的に、そしてドゥラにおいては、それに加うるに狩猟図やマゴス神宮像の図を一時的に採用したのであるうか。ドゥラのミトラス教史料はこの点で何か新しい解説をもたらすことが出来るのではないだろうか。

この問題で時間的な関係はかなり明らかである。なぜなら、ミトラス教が前一世紀中葉から後二世紀初頭までの間に形成されたと言う点では現在殆んどすべての研究者が一致しており、それはとりもなおさず、上述のドゥラとパルミラの歴史的、宗教的発展の時期と一致しているからである。⁽⁴¹⁾

四、発掘調査報告書の問題点

ドゥラのミトラス神殿はフランス古文書学院とイエール大学の協同発掘調査隊の手によって、発掘の第七シーズン（一九三四年）の一月に城内の北西隅城壁沿いにおいて発見された。このシーズンの現地の発掘隊長はC. Hopkins であった。⁽⁴⁴⁾ ミトラス神殿の発掘は副隊長（Comte du Mesnil du Buisson）の手によって指揮された。Rostovtzeff は発見の直前一月二十五日にドゥラに到着しており、ミトラス神殿の発掘では約一五〇の碑文の筆写を行い、同夫人は壁画の復元に従事した。⁽⁴⁵⁾ ミトラス教研究の最高権威 Cumont は二月に到着し、発掘に参加した。シーズン終了後、ミトラス神殿の遺構は根こそぎ撤去され、アメリカに運ばれ、現在イエール大学の美術館（Gallery of Fine Arts）に復元陳列されている。撤去作業とともに遺構の下や周囲の調査は第八シーズンの初期に、H. F. Pearson も副隊長によって継続された。

長い間刊行が予告されているこのミトラス神殿の正式の発掘調査報告書は未刊行であるが、中間報告は一九三九年の報告書⁽⁴⁴⁾の第二章に含まれている。又、それは Vermaseren のミトラ教史料集に要約されている。⁽⁴⁵⁾ 中間報告の構成と内容は次の通りである。

- I、序（編者）
 - II、遺構の年代と描写
 - A、後一六八年以前の遺構
 - B、初期ミトラス神殿（一六八～一〇年頃）
 - C、中期ミトラス神殿（一一〇年頃～一四〇年）
 - ドゥラ・エウロボスのミトラス神殿と初期ミトラス教（一）
- 六二一（頁）
- 六二一
- 六三
- 六四
- 七〇

D、後期ミトラス神殿 (11世紀～12世紀) (著 H. F. Pearson)

七八

E、ミトラス神殿建築の比較資料観書 (Rostovtzeff)

八三

III、奉納碑文 (Nos. 845-848)
(Rostovtzeff and C. C. Torrey)

IV、裝飾

A、概観及び碑文 No. 849

八九

(Cumont and Rostovtzeff)

B、淺浮彫

九一

C、小淺浮彫

九二

D、大淺浮彫

九五

II、淺浮彫の意見
(以 L. A. Campbell and H. C. Gute)

100

C、中期ミトラス神殿の壁画
(Cumont and Rostovtzeff)

101

(H. F. Pearson and Rostovtzeff)

D、後期ミトラス神殿の壁画及碑文 No. 853

102

E、神代記とミトラス神一代記

105

F、天の11窟図

110

III、一人のマコス神官

四、牛を屠る神ミトラス像

五、ミトラス神狩獵図

(以上 Cumont and Rostovtzeff)

E、壁画の技法と幾何学的の規則 (Marcel Aubert)

V、描線及刻線碑文

A、ナム(南無)碑文 Nos. 855-860

B、聖餐式碑文 Nos. 861-862

C、祭文碑文 Nos. 863-866

VI、総説

(以上 Cumont and Rostovtzeff)

附録 ハルミラベクトルクヤハンドロスの神殿 (碑文 No. 867-869)

(C. B. Welles)

次に、これ等の諸報告について、ムウラのミトラス神殿の編年の問題を中心に考察を加え、ミトラス教の起源の東方説と西方説の問題におけるムウラのミトラス教の位置を明らかにしたい。

このミトラス神殿の編年に対する報告書中の史料は一つある。即ち、一つは奉納碑文であり、他は建築の層位的認識である。神殿からは合計二五〇件の碑文(ペルミラ文字、ギリシア文字、ラテン文字)が発見されたが、最終報告書が出でないので、その全容を知ることは不可能である。しかし、その主要な傾向⁽⁴⁶⁾(四種類)と、奉納年の記された三つの碑文の

ムウラ・ハウロボスのミトラス神殿と初期ミトラス教(1)

110

111

111

115

116

119

114

116

118

111

全部は知ることが出来る。

第一は「後一六八年 Adar の月に、ドウラ駐在の司術部隊の指揮をとる、Zabdeā の子、將軍 Ethpeni によって奉納された良き記念碑」、即ち、神殿奥室の一つの「牛を屠る神ミトラス」の浮彫像のうちの小形の方と記されたものである。これはペルシラ語であるが、ギリシア語による短い碑文「隊長 (istratēga=stratēgos) Athpanei」も付記されている。
Conte du Mesnil du Buisson の研究⁽⁴⁸⁾が示す通り、このペルシラ語碑文の形式はドウラの他のペルシラ語碑文やハウラン地方の碑文、或は旧約聖書中に類似例のある純然たるシリア土着のものである。この碑文によれば、当時、即ち、ローマ軍によるドウラ占領後三年を経た時、ここにはペルシラ人の司術部隊がいて、その隊長がドウラのミトラス教信仰の中心人物であったことが分る。彼等がローマ軍の補助軍に直ちに編入されていたかどうかは断定出来ない。しかし、補助軍の名前がないこと、その指揮官が、イギリスのリメスのミトラス神殿の補助軍の場合のように、正規のローマ軍人ではないよう見えることなどから、これはペルティア時代のピルミラ人の部隊がそのまま残存したものとするのがよいであろう。Rostovtzeff はこれがローマ軍に編入されたのは、セヴェルス朝時代（中期ミトラス神殿の建立の時期）に近い、としている。⁽⁴⁹⁾ 又、ドウラのE四地区で発見された、ペルシラ人の宗教結社 (Marzea=Thiasos) の奉納碑文⁽⁵⁰⁾（後一八二年）や壁画からもローマ的なものは看取ることは出来ないばかりか、ミトラス教徒と同じ部隊の将校の手になるものと推測されている。

第二の碑文は、ギリシア語によるもので「後一七〇／一年に司術部隊の隊長で Iaribōles の子 Zenobios、別称 Eia-eibās が神ミトラス（の像）をつくらせた」と記されている。この像と文意は神殿奥室の「牛を屠る神ミトラス」の浮彫の大い方の奉納を指す。これも又ペルシラ人の手になることは、人名からも、浮彫のきわめてユニークな構図、即ち、通常の「牛を屠る神ミトラス」の図の傍に奉納者一族による供儀の図が入る、という特色によって明らかである。これは

パルミラの宗教美術に見られる様式であるばかりでなく、上述の如き前一世紀に始まる「宗教的共通言語」の系列に属するものである。⁽⁵³⁾

従つて、これ等二つの碑文とそれが奉納されていた神殿(初期ミトラス神殿)はパルミラ弓術部隊⁽⁵⁴⁾の首脳部の手で維持されたものであり、彼等は定められた方式、即ち、伝統的な「宗教的共通言語」によつて神殿を飾つたと考えられる。上述のようすに、パルミラ人の弓術部隊には、ナバテア人のそれの影響があつたと考えられるが、報告書によると、第一の碑文のパルミラ文字にはナバテア文字の影響がみられ、又、第二の碑文のついた浮彫中の柱頭装飾にはナバテア人の世界のそれが看取されるという。⁽⁵⁵⁾これをどう解釈するかは必ずしも容易ではないが、筆者が別稿においてその可能性を論じたように、ナバテア人の占拠していたハウラン地方に、後一世紀後半から同二世紀前半にかけて、つまりドウラのパルティア領時代の最盛期に、ミトラス神の密儀の痕跡が認められる⁽⁵⁶⁾とすれば説明しうる現象である。尚、パルミラ人の間にミトラス教徒がいたことはダキアの Dorstadt の碑文⁽⁵⁸⁾によつて知ることが出来るが、その年代を Dussaud のように、ハドリアヌス帝の時代にしてよいかどうかは分らない。奉納者の名前に Aelius があるから、同帝の時代以後のこととは確かである。

第三の碑文⁽⁶⁰⁾はラテン語のものであつて、「我等の主君たる三人の大元帥閣下、(即ち) L・セプティミウス・セヴェルス・ペルティナクス・ピウス、M・アウレリウス・アントニヌス、L・セプティミウス・ゲタなる三人の皇帝陛下の健康と安泰を願つて、皇帝直属の(シリアの)代官ミヌキウス・マルティアリスの配下にあつて、第四軍團スキュティカと第一六軍團フラヴィア・フィルマ・ピア・フィデリスとに所属する騎兵分遣隊指揮官、第一百人隊長アントニウス・ヴァレンティヌスの手で、不滅の太陽神ミトラスの神殿」を建立した、という主旨のものである。皇帝の統治年の考証によつて、この奉納碑文は後二〇九⁽⁶¹⁾~二一年のことであつたと推定される。上述のように、他の碑文によつて、遅くとも後二三〇年

までには、パルミラ人のローマ補助軍がドウラに駐留していたと考えられるが、この神殿は表面上は彼等のものではなく、正規の軍団兵の手になる。又、中期ミトラス神殿から始まつたとされる漆喰壁面上の刻線碑文の人名にもパルミラ系のものが見当らない⁽⁶²⁾。従つて、これ以後の二期にわたる神殿の經營はパルミラ人の手から、ローマ軍団の将校の手に移つたようにも見える。しかし、中期神殿の壁画には、「二人のマゴス神宮」と「ミトラス神狩獵図」というユニークな東方的図像があり、又後期神殿の壁画はセム系の画家マレイオスによって製作されたことが分るので、パルミラ人のミトラス教徒の間に伝えられた伝承が大きな影響を及ぼしたであろう⁽⁶³⁾。又、刻線碑文の人名もラテン系のものを中心とするといつても、東方系の軍人がそのような名前を称するということは、ヘロデ大王時代のサマリアやローマ帝政期のハウラン地方について指適されている通りなので、A・ヴァレンティヌスは勿論、その下にあつた騎兵分遣隊の中にもミトラス教徒がいて、それ等はパルミラ系の古い信者でなかつたとは断定出来ない。

さて、このように、ミトラス神殿史に関する二種の史料、即ち、碑文と遺構の層位とは Rostovtzeff と Torrey によって巧妙に結びつけられ、それ以後誰も疑う者がない。しかし、遺構に関する報告書の記述をみると細部についてはなお疑問が生じないわけではない。

報告書によれば、初期ミトラス神殿は第一の碑文が奉納された時、或はその少し前に建立された。少し前とするのは、この碑文が聖像奉納を記していても、神殿自体には触れていないからである。しかし、実際問題として、「牛を屠る神ミトラス」の像を奥室にいたゞかないミトラス神殿と云うものは考へることが出来ないので、初期神殿は後一六八年建立としてよいであろう。次の大改築は、第三の碑文、即ち、ドウラにローマ軍の陣営が大々的に建設されると同時に、ローマの軍団兵の神殿となつた際のものである。但し、初期神殿が約四〇年間も使用されつづけたと言う点には疑問がある。報告書の云う通り、ミトラス神殿の建築技術上の水準は決して高くなくむしろ粗末なものと云ふとすれば、初期神殿の使

用期間はかなり短かつたであろう。初期神殿を含む一帯はセヴェルス朝のドゥラに対するテコ入れ以前に荒廃していた。このような使用期間の断絶はリメスのミトラス神殿では通例のことであつたことが、最近のイギリスの発掘例によつて分つてゐる。それは外的原因为ばかりでなく、指導者の転任など信徒集団内部の事情によつても起つた。

中期神殿が第三の碑文の奉納された時に始まることは明らかであるが、それと後期神殿の間の時間的境界線として主張されている後二四〇年頃と云う数字は確かな根拠に基くのではない。それはササン朝の進攻に備えて、ローマ軍が強化された折に改修が起つたはずであり、その後比較的早く破壊された形跡があると云う理由で与えられた年代である。⁽⁶⁴⁾ ミトラス神殿が後二五六六年の直後に起つたシャプル一世によるドゥラ占領と運命を共にしたことは疑いない。

では、後一六八年に初期神殿が建立されたとしても、その前からペルミラ人たちはドゥラにおいてミトラス教の信仰を持つていたのであらうか。そうとすると、それに対していかなる遺構が当てはめられるであろうか。この点については発掘当時から調査隊員の間で微妙な見解の対立があつたように思われる。Rostovtzeff の報告に基くと云う短い文章によると、第一と第二の碑文付の二つの浮彫は、どこか別のところにあつた神殿から運んで来て、形をとゝのえた上で通常の住宅を改築した初期神殿に安置した傷跡があると云う。⁽⁶⁵⁾ そうとすると、第一の碑文と最初の神殿建立を結びつける上記の解釈は成立しないかも知れない。しかし、これは報告中においては、それは中期神殿を建立する際の傷であると考えられた。又、Campbell によると、報書中では付録として扱われてゐるセム人の Epinikos とその父 Alexandros による無名の神に対する壁画付の神殿奉納（後八六一八七年頃及び後一一六一一七年の改修）⁽⁶⁶⁾ をミトラス神殿奉納のこととしたのは、翌シーズンまで神殿の下や周囲の遺構を調べていた Pearson であった。⁽⁶⁷⁾ ところが、後者は Rostovtzeff との共著のレポート中では、後一六八年以前のミトラス教神殿の存在を認めていらない。そして、それに代つて、同じく発掘隊員中で、現今まで最も熱心にミトラス教を研究して來た Campbell がその説をひきついだ。彼によると、この個有名詞の分らない神

(Theos) とはミトラス神のことにして他ならない。しかし、報告書作成の頃までには、ローマ軍の占領以前のドゥラにミトラス教があつたと記載することを認めない、西方起源説の Rostovtzeff の主張が大勢を占めたようである。C. B. Welles は、報告書中でこの神はセム系の土着の神 Baal-Zeus であるとした。しかし、この主張にも十分な根拠が示されていない。

報告書が強調するように、初期ミトラス神殿はその奥室の整備の状態や神殿の設計が確立している点などから推測して、基本的には出来上った宗教のものであつた。ローマ軍による占領後⁽²⁰⁾一二三年のうちに、ペルミラ人の工術部隊が、ローマ帝国の宗教に入信し、神殿を建立することは十分にありうる。その際、「美術的共通言語」を使用して、セム系の美術家が図像を調製したとも考えられる。しかし、E. Will が指摘するように、ドゥラのミトラス神殿の図像には、あまりに非ローマ的で、ローマのミトラス教では一般化しなかつた要素が残存するから、ここにはローマの占領と云う新事態の到来によつて改革され、ほとんど消去されたが、「宗教的共通言語」から直接由来した発生期のミトラス神密儀の痕跡があるのでないかと思われる。

上記のような隊員間の見解の相違を考えると、このような疑問を全く打消すことは出来ない。更に純粹に考古学的見地から見て、ドゥラの発掘には方法論的な疑問もある。特に問題なのは、ミトラス神殿ばかりでなく、ドゥラの発掘調査全体を通じての小型出土物に対する完全な無視、とりわけ土器の年代決定要素としての価値に対する無視である。

当時のオリエント考古学においては土器の層位学的研究は未だ不十分であつたとはいえ、メソポタミアにおいても、シリア・パレスティナにおいても、多くの報告書が殆んどすべて土器の年代決定要素としての価値を認め、そのためには様々な記載を行つ⁽²¹⁾ている。これに対してドゥラの発掘者たちは、美術様式と碑文とに年代決定の根拠を求めていたため、遺構の年代の真の上限下限を決することが出来ない場合がしばしば起つてゐる。ミトラス神殿の場合、報告書中唯一の土器についての記載は、奥室祭壇上に埋め込まれた祭祀用甕形土器に関するだけである。⁽²²⁾

ドウラのガラス製品についての最終報告書に対する書評⁽⁷³⁾の中では、Barag はこの辺の事情を次のように述べている。「遺跡の状態、即ち、同住居の長期間に及ぶ使用、後二五六六年の城砦建設の際にひき起された破壊や墓地の盗掘などのために、ドウラには年代を明確に定めうる遺存状態が乏しい。これに加えて、恐らくは発掘調査の方法も挙げられなければならない。(ガラス製品の) 目録の七七八件のうち、一〇ペーセント以下の中だけに地点番号が記録されている」。「出土物の層位上のデータが欠けているので、年代決定上の障害が不可避となる。」このような欠陥が生じたのは、最近にいたるまで、アレクサンダー大王以後の遺跡については考古学的に粗略に扱う傾向があつた⁽⁷⁴⁾一方、隊員の多くが碑文と美術様式をたよりとする傾向が強かつた古典考古学の出身であつたためと思われる。従つて、ミトラス神殿においては比較的年代のわかる碑文が多く出土したために、上出の他の神々の神殿の場合よりも、その歴史をよりよく知ることが出来たが、これは好運であったと云なくてはならない。しかし、碑文と建築の層位との照合によって組み立てられたミトラス神殿の編年は、土器の編年によつて確認されたものではないから、その編年はもしもより合理的な推論が提供されれば、今後とも動く可能性がある。

五、要

説

以上の考察によつて、ドウラのミトラス神殿の編年は、Rostovtzeff を中心とする西方説だけを妥当とするものではない、Dussaud や Widengren が最近唱えた東方説をも成立させる余地を残すことが分る。従つて、ドウラを含むパラポタミアからシリアにかけての地域がミトラス教生誕の地である可能性、及びドウラの史料とりわけその中でも「宗教的美術的共通言語」を示しているものの中に、ローマによる占領以前の、古いミトラス教密儀に関する伝承をさぐりうる余地はまだ残されていると判断される。ここでは本報告書の外的要素の検討に終始したが、次には内的な検討、即ち信徒組織、神観念、図像、建築などについての分析によつて、ミトラス教成立史をさらに解明して行きたい。(未完)

註

(一) 瑪縕、"「トマ教の起源」"、*基督教研究*、Vol.42, 1969, pp.91-116 の體註。

(2) ルード、Cumont Q."「トマ教史」"、*瑪縕 Mysteres de Mithra* (瑪縕的形態論)、1921(1921) の瑪縕と彼の神體の傳承者 M. J. Vermaseren の瑪縕 Mithras, de geheimzinnige god, 1959 ふた本とも、"「トマ教形成史」"の二本で繋がる進歩がみられるのが分る。

(3) E. Will, *Le relief culturel gréco-romain, contribution à l'histoire de l'art de l'empire romain*, 1955, p.144, n.4 et passim.

(4) 瑪縕の歴史、其の神體とその他の S. Wikander (*Études sur les mystères de Mithras I*, Yearbook of the New Society of Letters at Lund, 1950) などによれば、

「瑪縕の神體」"、Cf., E. Will, op. cit., p.150; p. 154; Vermaseren, op. cit., p.17.

(5) "「トマ教史の研究」"、J. H. Breasted, *Oriental Forerunners of Byzantine Painting*, 1924.

(14) 瑪縕 F. Cumont, *Fouilles de Doura-Europos*, 1926.

(15) 瑪縕 M. I. Rostovtzeff et al., *The Excavations at Dura-Europos, Preliminary Reports I-VIII*, 1929-1939 (Dura-Report ふるべ)。トマ教の Final Reports は三冊に亘る。

(16) M. I. Rostovtzeff, *Caravan Cities*, 1932, pp. 93-119; ibid., *Dura-Europos and its Art*, 1938, pp. 9-31. Cumont, Fouilles (op. cit.), p. XI-LXIV. A. H. M. Jones, *The Cities of the Eastern Roman Provinces*, 1937 などによれば、"「トマ教の神體」"はその大廟の内部の中央部に立つて、

(6) 後述丸頭参照。

(7) Cf. Cumont, *Deux monuments des cultes solaires, Syria XIV*, 1949, p. 383: Cf. *Dura-Report VII and VIII*, p. 101.

(8) 補 (一) の體註。

(9) R. Dussaud, *Anciens bronzes du Louristan et les cultes iraniens, Syria, XXVI*, 1949, p. 220-222; R. Ghirshman, *Parthes et Sassanides*, p.48; p.116-117; G. Widen-gren, *Iranisch-Semitic Kulturbeggegnung in Parthischer Zeit*, 1960, SS.5; 8; 19-23.

(10) J. H. Breasted, *Oriental Forerunners of Byzantine*

註

(1) 瑪縕、"「トマ教の起源」"、*基督教研究*、Vol.42, 1969, pp.91-116 の體註。

(2) Cf. E. Will, *Nouveaux monuments sacrés de la Syrie romaine, Syria XXIX*, 1952, p. 72-73.

(3) Cf. E. Will, *Syria*, XXXVII, 1957, p. 390.

(43) Cf. Geo Widengren, op. cit., S. 19-S. 23.

(44) M. J. Vermaseren, Mithras (op. cit.), p. 21-23; E. Will, Le relief (op. cit.), p. 209 Dussaud & Widengren もつた東方謁の壯張者が、ペルシトスの發展の連續性を強調する點にだらうの点であつて、アラビア人の部隊があつたのか

か知れぬだらうの点であつて、アラビア人の部隊があつたのか

(45) Cf. M. J. Vermaseren, Corpus Inscriptionum et Monumentorum Religionis Mithriacae (CIMRM) I, 1956, No. 34.

(46) M. I. Rostovtzeff, F. E. Brown and C. B. Welles (eds.), Dura-Report of the Seventh and Eighth Seasons of Work, 1939 (Dura-Report VII and VIII) pp. 62-134.

(47) CIMRM I, pp. 57-72, Nos. 34-70; II (1960), p. 14.

(48) Cf. Dura-Report VII and VIII, p. 118; D. M. Robinson, op. cit., p. 260; AJA, XXXIX, 1935, pp. 4f.

(49) Dura-Report VII and VIII, pp. 83f. No. 845; Comte du Mesnil du Buisson, op. cit., p. 11-12, No. 19.

(50) Ibid., p. 47-48.

(51) Dura-Report VII and VIII, p. 88.

(52) Dura-Report VI, p. 168.

(53) Dura-Report VII and VIII, p. 84, No. 846.

(54) Ibid., p. 448.

(55) ハラハラ修羅。Cf. Rostovtzeff, Art, p. 78; Dura-

Report VII and VIII, p. 100.

(56) Ethpeni と Zenobios が同一部隊の交代した二人の隊員たるか、何せ二つの部隊があつたのかは分らぬ。

(57) 話(1)の翻訳。

(58) 同上 p. 108 翻訳。

(59) R. Dussaud, Le dieu léontocéphale mithriaque, Syria, 27, 1950, p. 253.

(60) Dura-Report VII and VIII, p. 85, No. 847.

(61) 十字修羅。

(62) Dura-Report VII and VIII, p. 122.

(63) ペルシトスの連體の壯方ども、母顯マドゥ神殿の刻線碑文 (Ibid., p. 125) と後半のペルシトス人の講社の碑文 (Dura-Report VI, p. 35, No. 612) の間に相似点が認められる。

(64) Dura-Report VII and VIII, p. 88.

(65) そのやつた現象といふ、筆者は昭和四五五年一月十九日、広島大学で開催された日本西洋史学会に於て、「イギリスのトルコ帝国と関する研究」の題で研究発表中で触れた。これにてこの会の機関に論文としてある。

(66) Robinson, op. cit., pp. 259f.

- (6) Dura-Report VII and VIII, pp. 128f., No. 867; pp. 129f., No. 868.
- (7) Leroy A. Campbell, Typology of Mithraic Tarrotones, *Berytus*, Vol. 11, 1954/55, pp. 31f. E. Will 記載文と安藤の論議母の、彼の記録に反対する (cf. *Syria*, XXXVII, 1957, p. 393, n. 1). C. Hopkins ('The Season 1934-5 at Dura, AJA, XXXIX, 1935, pp. 293f.) の初期神殿の調査の母の記録。
- (8) Dura-Report VII and VIII, p. 130.
- (9) Ibid., p. 127.
- (10) 瓶標' キヤニト 漢語標本(「—」), 埃斯' Vol. 41, No. 3; Vol. 42, No. 2, 1968/9 参照。この標の漢語の回の盤やシナマニドサ、K・E・ケリムハビアルの調査は発掘が行なわれた。
- (11) Dura-Report VII and VIII, p. 79.
- (12) D. Barag, *Israel Exploration Journal*, Vol. 17, No. 3, 1967., pp. 196-198 (C. W. Clairmont, The Glass Vessels, Final Report IV, Part V, 1963 と安藤の論議)。
- (13) P. Lapp, Palestinian Ceramic Chronology, 1961, pp. 2f.